

[その他]

2022年第8回スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム・ 広島における学生ボランティア活動報告

東川 安雄¹・相川 貴裕¹・加地 信幸¹

Report on Student Volunteer Activities at the 2022 8th Special Olympics Japan Summer National Games in Hiroshima

Yasuo HIGASHIKAWA, Takahiro AIKAWA, Nobuyuki KAJI

Keywords :

Special Olympics (スペシャルオリンピックス), Volunteer Activities (ボランティア活動),
Students (大学生)

1. 大会の概要

スペシャルオリンピックス (SO) とは、知的発達障害のある人たちに様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を、年間を通じて提供している国際的なスポーツ組織であり、運営はボランティアと善意の寄付によって行われている。また、オリンピックと同様に4年毎に夏季・冬季の世界大会を開催している。今回、広島県で開催された大会は、2023年にドイツで開催される世界大会への日本選手団選考を兼ねて開催されたものである。

- ①大会日程：2022年11月4日（金）から6日（日）
- ②競技種目：陸上競技，バドミントン，バスケットボール，ボウリング，馬術，サッカー，柔道，競泳，卓球，テニス，フライングディスク，自転車競技
- ③競技会場：広島市，呉市，三原市，北広島町の12会場
- ④選手宿泊所：広島市及び呉市内の宿泊施設
- ⑤参加選手・役員：約1,500名

⑥ボランティア：4,000人

2. ボランティア活動への参加状況

本大会への学生ボランティアの派遣については、全学的な共通理解の下、社会連携センターが中心となり推進していった。具体的な取り組みは次のとおりである。

1) ボランティア説明会

長束，阿賀，坂の各キャンパスにおいて、2022年5月から6月にかけて実施した。

2) ボランティア事前研修等

2022年9月28日（水）から11月3日（木）にかけてオンラインでの視聴により研修を行った。

3) 学生ボランティア参加者数

①総参加者数：165人

②学科別参加者数

看護学科：20人

子ども学科：6人

スポーツ健康福祉学科：130人

コミュニティ生活学科：9人

¹ 広島文化学園大学人間健康学部 (Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

③活動内容別参加者数

- ・DAL（デリゲーション・アシスタント・リエゾン：チームの世話，大会会場の運営，選手宿泊所の世話）：90人
- ・競技補助員：75人（陸上競技：25人，バスケットボール：15人，テニス：10人，水泳：18人，サッカー：6人，卓球：1人）

4) 活動の様子



DAL（宿舎サポート） DAL（ボウリング）



競技補助員（陸上競技） 競技補助員（テニス）

5) その他

スポーツ健康福祉学科では、「アダプテッド・スポーツ演習」の一部として位置づけるとともに、中級障がい者スポーツ指導員の資格取得を目指す者については、受講時に必要となる「活動実績」として今回の活動を取り扱った。

3. ボランティア参加学生に対する調査結果

1) ボランティア活動への参加動機

図1は、大会ボランティアとして参加した学生の参加動機についてみた結果(複数回答)である。「自分が成長していくうえで必要だと思うから」(66.1%)と答えた者が最も多く、次いで「人や

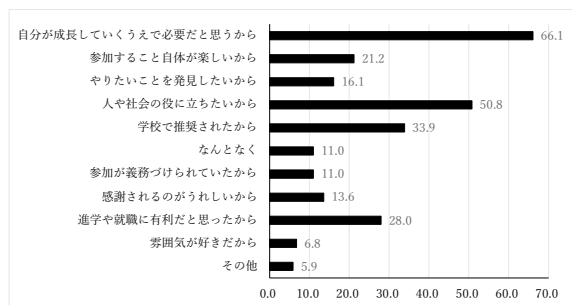


図1 ボランティア活動への参加動機 (%)

社会のために役に立ちたいから」(50.8%)、「学校で推奨されたから」(33.9%)、「進学や就職に有利だと思ったから」(28.0%)などと続いている。

2) ボランティア活動に対する満足度

図2は、今回のボランティア活動に対する満足度についてみた結果である。「とてもよかった」が79.2%と多く、「よかった」(18.9%)を合わせると98.1%となり、参加者のほぼ全員が高い満足度を示す結果となった。

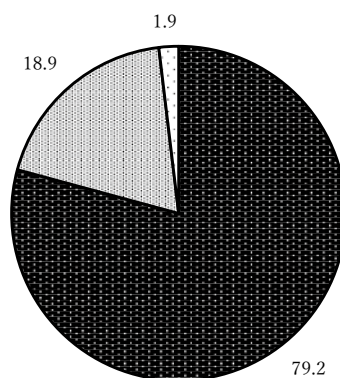


図2 ボランティア活動に対する満足度 (%)

3) ボランティア活動で学んだこと・得たこと

図3は、今回のスペシャルオリンピックス広島大会のボランティア活動に参加して学んだことや得たことについて回答を得た結果(複数)である。「自分にできることで社会にかかわり、人の役に立つことができた」と「活動そのものが楽しめた」がともに50.0%と最も多い。次いで「ものの見方や考え方が広まった」(41.5%)、「対象者や他の

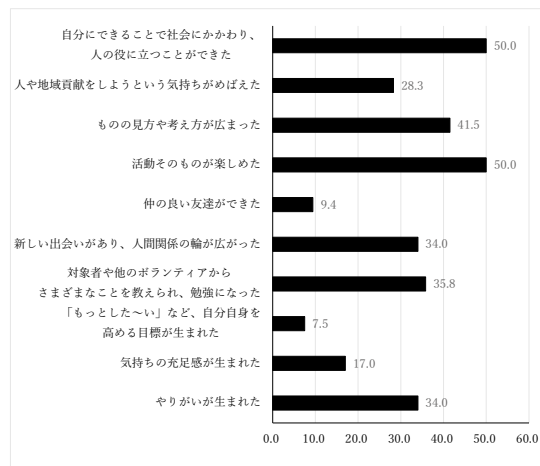


図3 ボランティア活動で学んだこと・得たこと (%)

ボランティアからさまざまなことを教えられ、勉強になった」(35.8%)、「新しい出会いがあり、人間関係の輪が広まった」(34.0%)、「やりがいが生まれた」(34.0%)などと続いている。

4) 今後のボランティア参加意向

図4は、今後のボランティア活動への参加意向をみた結果である。「ぜひ参加したい」(41.5%)と「できれば参加したい」(54.2%)を合わせて95.7%と、ほとんどの学生が継続したボランティア活動への参加を希望していることがわかった。

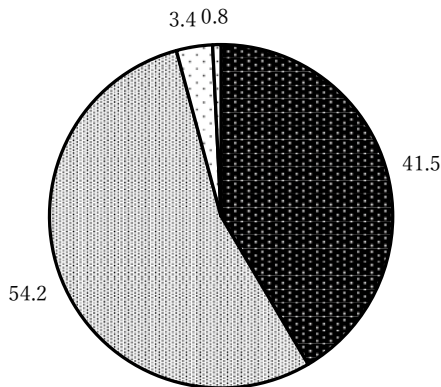


図4 今後のボランティア参加意向 (%)

5) ボランティア活動に対するイメージ

ボランティア活動のイメージを16項目設定し、それぞれについて「4. とてもそう思う」「3. そう思う」「2. あまりそう思わない」「1. まったくそう思わない」の4段階で回答を得た結果が表1である。「助け合う」(3.82)、「思いやりのある」(3.78)、「明るい」(3.70)、「社会貢献している」(3.70)などの項目において高得点を示し、肯定的に捉えていた。一方、「おせっかい」(1.87)や「強制的」(1.87)、「偽善的 (みせかけ)」(2.05)、「自己犠牲」(2.42)などの項目において低い得点となり、否定的に捉える傾向がうかがえた。人間健康学部生を対象とした寺西 (2022)の調査研究と比較すると、今回の対象者は、肯定的な項目についてはより高い得点を示し、否定的な項目についてはより低い得点を示す傾向にあり、本大会におけるボランティアとしての参加がボランティア活動に対するイメージに効果的な影響を及ぼしているものと推察された。

表1 ボランティア活動に対するイメージ

イメージ	平均値	標準偏差
助け合う	3.82	0.38
明るい	3.70	0.48
無償性 (見返りを求めない)	3.54	0.72
社会貢献している	3.70	0.53
偽善的 (みせかけ)	2.05	0.99
自発的	3.57	0.58
なくてはならない	3.53	0.61
自己満足	3.07	0.96
おせっかい	1.87	0.91
時間に余裕が必要	3.24	0.78
お金に余裕が必要	2.58	1.04
思いやりのある	3.78	0.44
自己犠牲	2.42	1.04
責任感のある	3.64	0.55
強制的	1.87	0.93
まじめ	3.06	0.91

6) 障がい者スポーツに対するイメージ

障がい者スポーツに関する項目を3つ設定し、それぞれについて「4. とてもそう思う」「3. そう思う」「2. あまりそう思わない」「1. まったくそう思わない」の4段階で回答を得た。結果は表2のとおりである。「障がい者スポーツに興味がある」については、「とてもそう思う」(42.4%)と「そう思う」(50.8%)を合わせて9割以上の学生が、今回のボランティア活動を通して障がい者スポーツに興味関心を示す結果となった。「障がい者と一緒にスポーツをするのはむずかしい」と「障がい者は、できるスポーツが少ない」については、それぞれ7割から8割(「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を合わせて)

表2 障がい者スポーツに対するイメージ

	とても そう思う	そう思う	あまり そう 思わない	まったく そう 思わない
障がい者スポーツに興味 関心がある	42.4	50.8	6.8	0.0
障がい者と一 緒にスポーツ するのはむず かしい	15.2	11.9	47.5	25.4
障がい者は、 できるスポー ツが少ない	9.3	10.2	43.2	37.3

の学生が否定的に捉える結果となった。

7) 参加した学生の主な自由記述

- ・色んな人と話して、どんなことが大変か、逆にどんなことが楽しいのかを知ることができて良かったです。コーチの方が「色々大変だけど、みんなで楽しく笑顔でスポーツを頑張っている姿が一番嬉しいから、これからもアスリートをサポートしていきたい。」と仰ってしていたことに感動しました。(子ども学科1年: DAL (チーム・サポート))
- ・初めて障がい者の方のスポーツ大会を見て、障がいを持ってない人とあまり変わらなくて、純粹にスポーツを楽しんでいるなと思いました。参加してとても良い経験になりました。(子ども学科1年: DAL (チーム・サポート))
- ・最初は障がい者の方が集まるという点から、コミュニケーションが取れなかったりなどの不安な点が多かったのですが、実際に行ってみると、障がい者達が気さくに話しかけてくれ、不安な点であったコミュニケーションを不自由なく行うことができました。今回のボランティアに参加して、ボランティアに対しての考え方が良い方向へと変わったので、これから先ボランティアをするチャンスがあれば挑戦していきたいと思いました。(看護学科2年: DAL(選手宿舎・サポート))
- ・最初、任された場所を1人で担当できるのかと不安でしたが、他のボランティアの方と連携し協力する大切さや、それによる楽しさを知ることができました。また、選手を笑顔にできるよう、一日の疲れを癒していただけるようなサポートをするという目標を持ちながら挑みました。しかし、選手やコーチから逆にエネルギーをいただき、幸せな気持ちになりました。コロナ禍ということもあり、今まではこのような貴重な機会がありませんでした。しかし、少しおさまり今回のように機会をいただいたことに感謝したいと思います。(看護学科2年 (DAL (選手宿舎・サポート))
- ・ボランティアに参加して、新しい視点で交流す

ることができました。2日間、一緒にずっといて、最初は心を開いてもらえなかったけど、2日目から試合前にグータッチをしたり、一緒に写真を撮ったりなど、私自身も凄く楽しくて、いい体験ができました。またこのような機会があれば参加したいです。(スポーツ健康福祉学科1年 (DAL (チーム・サポート))

- ・障がいがあっても、私たちと変わらずに、プレーし、勝つ喜びや負ける悔しさを味わいながら、真剣に取り組んでいる姿に感動しました。また、感謝の心を忘れずに、お礼を言ってくださった方がほとんどだったので、とても嬉しい気持ちになり、私たちも頑張らないといけないなという気持ちになりました。(スポーツ健康福祉学科3年 (競技補助員))
- ・何をしたらいいのかわからない時もあったけど、自主的に動けたと思うし、上手く回らずモヤモヤしたこともあったけど、アスリートの方やサポーターの方からの「ありがとう。」で全部吹き飛びました。人の役に立つっていいことだな、と改めて思いました。スペシャルオリムピックスはすごく温かいなと感じたので、もっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。(コミュニティ生活学科1年 (DAL (チーム・サポート))

<謝辞>

2022年第8回スペシャルオリムピックス日本夏季ナショナルゲーム・広島への学生ボランティアの派遣に際しては、社会連携センター・ボランティア担当委員の皆様のご支援により、学生が安心して参加することができました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 寺西洸介(2022) 大学生のボランティア経験とボランティア観に関する研究-広島文化学園大学の実態について-。広島文化学園大学人間健康学部卒業論文。